薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・

２０２４年
１月２５日
第１６０号

カラタチバナ
（サクラソウ科）

前号で紹介したアリドオシの南側で、赤い果実が見られます。別名ヒャクリョウ（百両）で、マンリョウ、センリョウとともに、正月の縁起物とされます。東アジア原産で、和名の由来は、タチバナと似た花をつけ、中国渡来の植物と誤認して「唐」の接頭語をつけたことから。中国の民間伝承で、老人が山からこの植物の葉を噛み砕いて少年の傷口に塗ると、すぐに出血が止まり、痛みが和いだことから、打撲の特効薬とされたとか。中医学では、根および根茎を生薬であるヒャクリョウキン（百両金）として、清熱利湿、活血解毒を目的に、咽喉痛、咳嗽、黄疸、関節痛、打撲、蛇の咬傷などに利用するそうです。日本でも根を民間薬として鎮咳、去痰を目的に利用されていたそうです。

シチヘンゲ
（クマツヅラ科）

管理棟の横で花が咲いています。花期は６月ごろから冬にかけて長く、名前の由来は花の色が次第に変化することから。中南米原産の常緑小低木で、属名からランタナの名で園芸植物として流通していますが、生態系被害防止外来種リストに登録され、栽培には注意が必要な植物です。中医学では、花を生薬のゴシキバイ（五色梅）として、清熱、止血を目的に、腹痛、下痢、吐き気止め、湿疹などに利用するそうです。アユルベーダ医学では、葉が強壮、発汗、解熱、抗菌、駆虫を目的に、根が解熱を目的に使用されるそうです。ただ、葉にはランタデンという毒性成分を含み、家畜が食べて肝障害を起こしたり、クマリン類により光線過敏症を発症したりなど、有毒植物でもあります。